

棚田に吹く風



3 2011
月号
Vol.75

隔月刊

2 特集 耕作放棄される棚田

5 フォトエッセイ
棚田のあるところ

6 棚田・里山からのたより
高柳・棚田応援プロジェクト物語
新潟県柏崎市高柳地区

8 棚ガール
田んぼの生き物たち

9 棚田博士は今日も行く
古代の道「暗越の道」沿いにある棚田
奈良県生駒市西畑

12 会員のひろば

14 棚田ネットワークの
かつどうノート
kamyのつぶやき

15 Project Report



中山間地のどこにも見られる光景（写真は新潟県十日町市）

特集

耕作放棄 される 棚田



棚田の耕作放棄

棚田ネットワーク代表 中島 峰広

棚田の耕作放棄は1970年に始まった。この年は、日本の米づくりの歴史のうえまさにコベルニクスの転回が行われた年として銘記されている。農林省は、この年まで開田を奨励、たとえば新潟県長岡市の越路原のような丘陵台地のボイ山に渋海川から大型ポンプで揚水し水田を作っていた。それが転じてコメ余りにより生産調整を始めたのである。

その結果、棚田は平坦地の水田に比べて労力は2倍、収量は半分といわれるように労働・土地生産性ともに低いことから狙い打ちされるように転作・放棄されるようになった。この時、農林省は将来の見通しを誤りスギ林への転換をすすめた。しかし、衆知のごとく安価な外材の輸入により木材価格は暴落、立派な石垣の残る棚田は手入れされない荒れたスギ林にかわり、無残な姿を曝すことになったのである。この情景を広島宮本常一といわれる民俗学者神田三亀男は「人間の営みあわれ石崖の棚田ことごとく杉の茂り」、「奥山の棚田の杉も伐採期伐り賃も出ずと老いら嘆ける」と歌に詠んでいる。

その後、棚田をとりまく環境はさらに悪化、過疎高齢化により耕作する担い手がいなくなり、転作・放棄に一層拍車がかかった。これまでにどれだけの棚田がなくなつたか、農水省でも把握していないので推測によるしかない。農水省の資料により算定した1988年の棚田面積は22・3万畝。2009年の直接支払の対象面積15・8万畝が現在の棚田面積とすれば、30%ほど減少している。したがって、耕作放棄が始まった1970年に遡ってみるならば、この時から日本の棚田のおよそ半分が放棄されたのではないかというのが私の考えである。



Case 1

植林された棚田

愛知県新城市
四谷の千枚田

戦後の経済成長、減反政策（コメあまり対策）が起因した放棄田は中山間の棚田全域でみられる。平坦地の水田ですら原野に等しい変貌を遂げている現在、作業効率の悪い棚田は当然のごとく減少の一途を辿る。そんな中、「四谷の千枚田」をみると、減反政策において休耕、転作を余儀なくされた山付きに植林された杉林が生長し、日照時間も短縮され、収穫に影響を与えている。

減反政策まつただ中、強制的な休

耕に棚田を代表して協力していただい

た百姓衆が、観光気分を訪れる連中に石積の棚田の杉林をみて「ああだ、こうだ」いわれる筋合いはないと思うが、大きな誤算が生じた。杉の木は40年すぎれば成木として販売できるが、現在の木材価値の低迷でなすすべがなく、放置林化されているのが実情である。

今、願うことは、千枚田を囲む杉林の森林管理を積極的に施し、「四谷の千枚田と美林」としての価値を深めることにある。

（鞍掛山麓千枚田保存会 小山 舜二）



Case 2

棚田と気付かなかった

長野県大町市

今住んでいる長野県大町市美麻（旧美麻村）北部は棚田跡の宝庫（？）です。多くは茅などが茂つていたり、大木が数回間隔で繁つています。夏は草で覆われていますが、冬に雪が積もると平らになります。この辺でやつてる田が全くないことを知っていれば、ここがそうだと分かります。でも、道より上にあるものは分かりません。11年間も毎月のように来て

いるのに、家の裏の林道のすぐ上の荒れ地が50年前の田んぼだったことに気付きませんでした。家から歩いて10分ほどの、林道から急な山道を登った上に昔の大きな棚田があると最近聞いて、まさかと思いつながら行ってみると、急な尾根の上にぽつかり大きな田の跡があつて、まるでマチュピチュのようです。

（棚田ネットワーク 大門 正明）





Case 3

雪解けで現れる放棄田

新潟県十日町市

棚田ネットワークが活動を始め

て数年後、長野県在住の一人の会員から電話があつた。「写真家にも人気のある〇〇の棚田が、来年からもう耕作できなくて止めるらしい。何とかありませんか」。けれど、他人に気軽に頼めるような話ではないし、かといって、自分で耕作することも東京

に住んでいる私たちに

はできなかった。あの

田んぼは今はどうなっ

ているだろうか。

棚田地域への行き帰り。夏は茅の

緑、秋は銀色のススキの穂。それらの多くが元・棚田であることを知ってからは、風景が違って見えるようになり、ため息をついていた。段々とため息も出なくなっていたが、それでもこの光景には言葉を失った。

(棚田ネットワーク 高野 光世)

夏場は背丈を超える茅に覆われ、冬は3メートルの豪雪の下に埋もれ、そして雪解け後の5月末、このような風景が現れる。放棄後十数年、毎年繰り返される光景。



耕作放棄率9割近くだった棚田を復田

静岡県賀茂郡松崎町
石部棚田



1999年には約9割が耕作放棄されていたが(写真上)、2000年から、約4割の生い茂った雑木、雑草の刈り取りを行い復田を開始。2002年には棚田オーナー制度が始まった。下の写真は現在の棚田。



子供のころは、今の石部棚田だけでなく地域のあちこちに、それこそ入り江近くの海拔ゼロメートルから標高250メートルまで棚田があつた。当時はすべて手作業で、よく手伝わされた。

棚田の復田を提案したのは、観光客を呼び込むことなどで地域に活気を取り戻したいと考えたから。よく一次×二次×三次で六次産業化といわれるけれど、なかなかそんなにきれいにはいかないと思う。

周りの里山も含めたこの環境は、本当にかげがえがないもの。棚田の価値を教えてくださいなのは外部の人だが、地域の意識が変わるのは時間がかかると思っている。(談)

石部地区棚田保全推進委員会 高橋 周蔵

棚田の あるところ

写真と文 大塚 雅貴



Profile

写真家

大塚 雅貴

おおつか まさたか



1968年、千葉県生まれ。1993年、写真家・野町和嘉氏の助手としてサハラ砂漠取材に同行。1997年からエジプトでアラビア語留学を経て、リビア、ニジェール、マリなどのサハラ砂漠を取材する。2004年キャノンマーケティングジャパン(株)カレンダーの撮影を担当。写真集「耕して天に至る〜中国・雲南 世界一の棚田」(毎日新聞社)を出版。現在、北アフリカを中心に遺跡やサハラ砂漠の撮影を続け、雑誌や個展などで作品を発表している。

■大塚雅貴オフィシャルホームページ
<http://www.photo-otsuka.com>

個 展

- 2000年「食巧の美」(中国雲南の棚田) 開催(銀座キャノンサロン)
- 2003年「砂が描く大地」(最奥のサハラに行く)開催(銀座富士フォトサロン)
- 2004年「山郷」開催(全国キャノンサロン)



残したい日本の原風景

高知県高岡郡梶原町影野地集落

美しい棚田の場所を求めて高知県吾川村の山間部に向かいました。そこは、急斜面にへばり付くように幅数メートルほどの棚田で穂が揺れる風景でした。ところが、そこは雑草が生え休耕田となっていました。「もうその棚田では米を作ってないよ」「おじいさんが亡くなってお婆さん一人での米作りは無理だからね」と、役場の担当者。

吾川村での撮影を諦め、4年前に訪れた梶原町影野地集落の棚田に向かいました。そこは、入り組んだ道の先にあったために、誰にも知られることのないお気に入りの撮影場所でした。が、ここの景色は激変。棚田の半分が休耕田となり、残った棚田では老夫婦が草取りに汗を流していました。人声もなく、廃屋が目立ち、風に揺れる木々の音だけが聞こえました。美しい棚田の風景をとらえる一方で撮影を重ねるごとに過疎化という深刻な問題を実感しました。問題の解決にはなりませんが、写真を通してこれからも各地の棚田を伝え続けていきたいと思います。



高柳・棚田応援プロジェクト物語

新潟県柏崎市高柳地区

この物語は、今年90歳を迎える辰治おじいちゃんの、さりげない一言がきっかけで始まりました。「秋の空に、赤とんぼがいなくなつた!!」と。その言葉を聞いた瞬間、私は衝撃を受けました。そんなまさか…。

その当時、私は東京でサラリーマン生活を送っており、お盆に帰省中の出来事でした。赤とんぼといえは秋の代名詞です。幼い頃から米作りのお手伝いを嫌々やっていましたが、秋の収穫期に空を見上げると、空一面に悠々と飛んでいる赤とんぼを見る事は大好きでした。今でもその景色は鮮明に覚えています。

田舎では、赤とんぼの問題だけでなく、休耕田、稲作の担い手不足などさまざまな深刻な問題を抱えており、「ふるさと高柳」へ恩返しする為に、花の都「大東京」に別れを告げ、女房1人娘1人を連れリターンする事を決意しました。

一年目・土台づくり

ふるさと高柳へ戻って米作りを始め、一番驚いた事は、農薬や除草剤などに依存している農家が圧倒的に多く、私が無農薬で安心安全なお米を作ろうと思っても、話がかみ合わない事でした。両親と兄を説得するのにも、かなりのエネルギーを使いました。

1年目は、農薬が無い頃の米作りのやり方を辰治おじいちゃんから教わり、棚田オーナーにご登録いただいた東京、埼玉、群馬、栃木の方々にも田植え、田の草取り、稲刈りなど一連の作業を体験していただき、季節ごとにイベントを開催し交流を深めながら、生産者と消費者の顔の見える関係作りの土台が出来上がりました。

イベントの中で最も評判が良かったのは、春の山菜パーティーでした。棚田のある山奥で山菜を採り、その場で天ぷらに揚げて、

上・下右：馬蔵おじいちゃんと棚田オーナーによる稲刈り／下中・左：山菜パーティー

揚げたてを食べていただきました。

1年目の大きな収穫は、バラバラだった樋口家の家族が、同じ方向を向く事が出来た事です。機械化の世の中ですが、樋口家の米作りは手作業がメインなので、家族が協力し合わないとなり立ちません。米作りを通じて、家族がつながる事が出来ました。

二年目・仲間の拡がり

2年目。樋口家のテーマは「家族をつなぐ米作り」。直樹父ちゃんのお癖は「気配り、思いやり、感謝！感謝！」。樋口家は、心を一つにして無農薬の米作りに挑戦しました。

この年から、高柳の専業農家で有機栽培のスペシャリストでもある鈴木貴良さんに指導をお願いし、有機栽培の考え方、技術などを伝授していただきました。また、鈴木さんの発案で、高柳の将来を担う20代30代の若手衆5人組で、全国食味コンクールで最優秀賞を受賞された長野県伊那市の農家を訪問し、技術指導を受けました。

棚田オーナーの方も、新東産業株式会社様を筆頭に、法人オーナー

様のバックアップもあり、1年目には開催出来なかった収穫祭を10月に開催し、地元の小・中学生による黒姫太鼓という伝統的な和太鼓の演奏も披露する事が出来、参加したオーナーの方々からも喜びの声をいただきました。

2年目の大きな出来事としては、地元の新潟産業大学の阿部准教授と意気投合し、阿部先生のゼミ生（モンゴル人留学生含む）に、棚田での米作りに参加していただきました。そして、地域社会を活性化させる目的で、NPO法人環境資源開発研究所の新潟支部を設立しました。

三年目の幕開け・いい刺激

ホップ、ステップ、ジャンプの3年目。今年はいよいよウサギ年です。今、私はワクワクしています。今年は棚田でどんなドラマが起るのか!!

昨年11月に開催された第5回東京棚田フェスティバルに、初めて参加し、新潟県内の他地域の団体とも情報交換する事が出来ました。その中で、早速今年の1月8日に十日町市で開催された地域力再生



上：黒姫太鼓／下：新潟産業大学阿部ゼミの学生たちによる田植え

シンポジウム「空き家を活かし、古民家を直して引き出せ！地域力」に参加しました。広島と島根から、古民家再生のプロ、田舎活性化のプロが講演され、とても勉強になり、良い刺激を受けました。田舎には無限の可能性がある事を再確認でき、大変有意義なシンポジウムでした。

高柳には、眠っている棚田が沢

山あります。一度休ませてしまうと、元に戻すまでには2、3年かかりますが、一枚一枚の棚田を丁寧に復旧し、次の世代の為に、自分が動けるうちは一枚でも多くの棚田を元に戻し、秋には赤とんぼが空一面に飛んでいる景色を守っていきたいと思います。

NPO法人環境資源開発研究所新潟支部
重左衛門十代目 樋口芳曉

高柳の棚田へのアクセス

【電車】北越急行ほくほく線orJR飯山線「十日町駅」からタクシーで約30分

【自家用車】関越道六日町インターから国道253へ入り信濃川を渡ったら、浅河原の信号を右折、しばらく直進して上野の信号を左折し国道252に入る。そこからしばらく行くと高柳地区。

お問い合わせ

重左衛門 樋口 芳曉 Tel.0257-41-2839



棚 ガール Tana Girl

Vol.2

徳島県勝浦郡上勝町

櫻井 麻里絵 (26歳)

棚田の虜になった乙女、通称「棚ガール」

そんな女性を紹介するコーナーです!!



「棚田で婚活」イベントのスタッフとして



私は今、徳島県の上勝町という人口2000人弱の田舎に住んでいます。もともとは東京の出身ですが、「緑のふるさと協力隊」という農山村で田舎暮らしをするプログラムがきっかけで、上勝に来ました。

今は町内でまちづくりの仕事をしています。その中で棚田や果樹、畑を貸し出すオーナー制の事務局などしています。オーナー制は1年契約で借りることができ、家族、学生のゼミなどの団体で借りることが多いです。

そんな中で、もっと若い人達に気軽に棚田を知って欲しい!という想いから、今話題の「婚活」と結びつけ、2年前に「棚田で婚活」という1泊2日の農山村体験プログラムを企画しました。プログラムは田植え編、草刈り編、稲刈り編、と年3回あります。1日目に棚田で農作業体験をし、2日目は上勝の名物観光、ヤッホー体験をします。初めて顔を合わせる男女でも自然の中での共同作業はお互いも1人1ラックスでき、自然と仲良くなることができます。2日目の最後のヤッホー体験でカップル発表となります。最後にカップルが成立したところは手をつなぎ、片方の手で一緒にハートを作り、2人で「好き!」と叫ぶことができます。できます、というより、してもらいます(笑)。山彦が「好き!」「好き!」と返ってきたら、二人の愛は大きく実ることでしょう。…というプログラムを企画しています。

カップルができることもスタッフとして嬉しいのですが、何よりも上勝のファンになってもらいたい、上勝にまた遊びに来て欲しい!という気持ちをもって取り組んでいます。これからも心に残るような企画を考えて、もっと棚田ファン・上勝ファンを作っていきたいです。

撮影：桐原真希

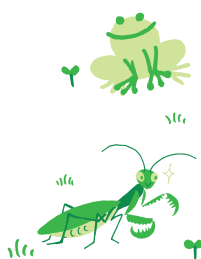


名前の通り、獅子の頭のような「獅子頭(シシガシラ)」。そっくりさんが多いシダの世界でも、シシガシラは他のシダと区別がつきやすい種類です。由来を知った時に、いつか、獅子舞に使われる本当の獅子頭と、植物のシシガシラと一緒に撮影してみたいと、いたずら心が湧きました。

このシダは、北海道から屋久島まで分布している、いわゆる普通

田んぼの
生き物たち

第24回 シシガシラ



種で、かつ日本特産種となっています。常緑で、年中緑色の葉をつけています。雪深いこの季節も、冷たい圧雪の下で、春を心待ちにしていることでしょう。棚田に続く作業道沿いなどで、そこに土がむき出しの斜面があると、たいがい当たり前のように、大きな葉を垂らしています。

食用になるコゴミ(クサソテン)やゼンマイ等と違い、シシガシラは、生活に殆ど利用されない植物です。それ故、全国に生育しているにもかかわらず、認知度はことのほか低いようです。

シシガシラという、サザンカとツバキの交雑種である樹の花や、オランダシシガシラという金魚の品種のほうが有名かもしれませんが、他にも野鳥で「ヤッガシラ」という渡り鳥もいます。「○○ガシラ」という生き物が他にもいるか、調べてみると、出会えなくても楽しくなりそうです。

(自然観察指導員 桐原真希)



棚田博士 は 今日も行く!

中島峰広の
全国棚田行脚

古代の道「暗越の道」沿いにある棚田

奈良県生駒市西畑



なかしま みつひろ
中島 峰広 (棚田博士)

早稲田大学名誉教授。学術博士。NPO
法人棚田ネットワーク代表。棚田学会会
長。全国棚田(千枚田)連絡協議会理
事、棚田サミット開催地選定委員会委員
長。1933年宮崎県生まれ。早稲田大
学教育学部地歴科卒。2004年まで早
稲田大学教育学部教授。著書に『日本
の棚田—保全への取り組み』『百選の棚
田を歩く』『続・百選の棚田を歩く』(以
上、古今書院)。現在、百選外の棚田に
ついての執筆準備のため全国行脚中。

の代表出口育宏さんと、生駒駅で
はクラブの幹事西屋哲雄さん、林
宏さん、大寺道代さんの3人と合
流した。

歴史ある街道を歩く

生駒市は、奈良県北西部にある
大阪の近郊都市。大阪平野と奈良
盆地を分ける生駒山地の東斜面を
市域としている。西畑は市の南西
部、テレビ塔が林立する生駒山頂
南1^{キロ}の地点に位置し、奈良時
代、難波と平城京を結ぶ最短の道
路として知られる「暗越の道」、国
道308号沿いにある集落。標高
350〜390^{メートル}に民家が点在、
標高455^{メートル}の暗峠まで直線距離
にすれば600^{メートル}ほどのところ
にある。

2009年12月中旬、棚田の保
全活動を行っている市民グループ
「いこま棚田クラブ」のメンバー
と一緒に西畑を訪ねた。新幹線で
東京を発ち京都で下車、近鉄橿原
線に乗り西大寺で近鉄奈良線に。
さらに生駒で近鉄生駒線に乗り換
え、最終の目的地・南生駒で下車
した。この間西大寺で棚田クラブ

駅の西口から、百人一首で「た
つ田の川ののにしきなりけり」とよ
まれた竜田川沿いに南へ少し歩き、
交差点を右折すると国道308号、
小瀬橋を渡ってからは真つすぐの
道。河岸の標高が111^{メートル}、西畑
までは250^{メートル}ほど上らなければ
ならない。国道168号を横断す
る交差点には、暗峠への案内にと
もに、国道308号の道幅が1・8
^{メートル}しかないことが表示されている。
国道であっても、古代の道は趣の
ある家並みを残すために拡幅しな
いのである。

道はすぐに坂道となり、南生駒

小学校を過ぎ、萩原町が終わる辺
りで市街地から抜け出す。左手に
は放棄田が目立つ30段以上の石積
みの棚田、右手には溜池が現れ、
景色は田園風景に一変する。藤尾
辺りまで来ると坂道がきつく、賑
やかだったわれわれの会話も途絶
えがちになる。

道は山のなか、鬼取集落への分
岐点を過ぎてしばらくすると、傍
らに首つり地蔵とよばれる舟形地
蔵がひっそりと立っている。出口
さんによれば、難波から来た旅人
が奈良の都まではまだ遠いことに
落胆、ここで首を吊ったという伝
聞に由来するとのこと。地蔵を過



1：西畑の棚田／2：四阿と水車／3：いこま棚田クラブのメンバー。右が代表の出口さん／4：スケジュールの書かれた黒板

ぎて道を曲がると視界が開け、目の前に西畑の集落が姿を見せる。生駒山地の鞍部、暗峠に向かって上っていく国道に沿って民家が並び、その前面に見応えのある棚田がひろがっていた。

棚田は、道路より下の傾斜5分の1の斜面に拓かれている。神田川の左右に分かれ、左岸側は道路がある山側から谷に向かって、右岸側は狭い河床に階段状に棚田が並んでいる。谷幅が広い下流部の左岸側では、1枚の大きさが3×4[㍎]、石積みの高さが1×2[㍎]の等高線状の棚田が十数段みられ、よく耕作されている。それより高い部分には1枚が2×8[㍎]と大きさに違いがみられる長方形の棚田が

20段近くあるが、一部は耕作放棄されている。石積みの高さは2[㍎]前後のものが多いが、3[㍎]をこえるものもある。右岸側の棚田は1枚の大きさが1×2[㍎]、畑として利用されているか放棄されているものが多い。神田川には上懸けの水車がかかけられ、その横には四阿風の休憩所が建てられていた。右岸側の休耕地は棚田クラブの集会所として利用されており、石を積んだだけのかまどを囲むようにして丸太のベンチが置かれていた。谷幅が狭い上流部の左岸側は、道路あるいは民家の下から谷に向かって十数段の棚田が3列ほど並んでいる。1枚の大きさは2[㍎]前後、石積みの高さは1×2[㍎]ほど、

比較的良好に耕作されている。右岸側には1枚の大きさが1[㍎]前後、石積みの高さが1[㍎]前後の棚田が十段前後みられるが、下段の数枚を棚田クラブが利用しているほかは放棄されている。

西畑全体では30畝の水田があるといわれるが、生産調整で放棄が始まり、生駒山を貫通する阪奈トンネルの掘削により水脈が断たれると、水不足により一段と荒廃が進んだ。現在耕作されているのは5×6畝、その用水は被害地域の西畑・鬼取・大門・藤尾・小倉寺の5大字で結成される土地改良区によりトンネルからの出水をポンプアップして導かれている

いこま棚田クラブの幅広い活動

同行した棚田クラブのメンバーは、1994年に大阪自然環境保全協会に開設されその後NPO法人として独立した、シニア自然大学の卒業生たち。自然保護の具体的な活動場所を探す過程で西畑に巡り合い、2003年6月から15名で放棄地の草刈りを行うなど、景観を守るボランティア活動を始めた。そして、10月に「いこま棚田クラブ」を立ち上げたのである。

同行した4人はその中心メンバー。代表幹事の出口さん(70歳)は電機会社のOB、補助金の申請が上手な調整型のリーダー。会計幹事の西屋さん(69歳)は鹿児島から集団就職で大阪へ。退職するまで家電製品の量販店勤務、雑務を厭わず、字が上手で耕耘機も使いこなす器用な人。幹事の林さん(70歳)は電機会社を中途退職、30歳台に3年かけて友人3人と世界一周をなしたとげたヨットマン。その後定年まで印刷会社勤務、今は毎朝ウォーキングをしながらゴミを集める社会貢献の意識が高い行動派。事務局長を勤める大寺さん(67歳)は商社会社のOG、クラ

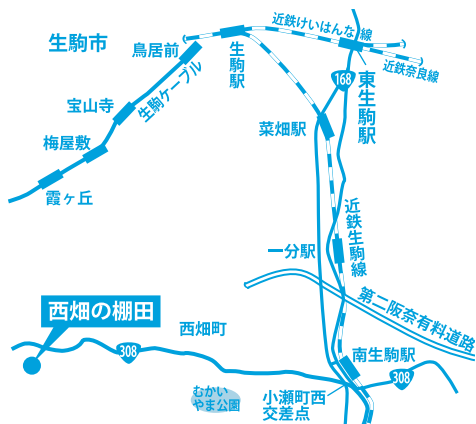
いこま棚田クラブ

■いこま棚田クラブホームページ
<http://www.k2.dion.ne.jp/~ikoma/>

西畑棚田を守る会

放棄された棚田4畝（3枚）にウメ、10畝（4枚）に大豆、20畝（6枚）にソバを栽培、収穫物を集落で営業するうどん屋「峠の茶屋」や「ビューカフェ」などで販売している。このなかでは、収穫した大豆で作ったミソの評判がよく、2009年の売上げは30万円で会の重要な収入源になっている。

西畑の棚田へのアクセス



近鉄生駒線生駒駅から車で15分。国道168号線
小瀬町西交差点を右折して国道308号線に入る。

集落と都市住民が支え合う

ブのマドンナ的存在で渉外を担当し、
 気配りのできる人。これら4人の
 キャラクターがうまくとけあいクラ
 ブを動かす原動力になっている。

活動は草刈りから始めて、西畑棚
 田を守る会の会長・東野恭己さんを
 通じて集落に浸透。放棄地の復田、
 作物の栽培、山林の整備と間口を広
 げて行つた。(注)

この棚田クラブと密接な関係にあるのが、地元農家によつて組織される「西畑棚田を守る会」である。2003年に耕作放棄が目に見え

ようになり、危機感を募らせ設立された。その時自治会長だった東野さんが会長に選ばれ現在に至っている。守る会と棚田クラブを結びつけた東野さんの働きがなければ、現在のクラブの活動は存在しないだろうと出口さんは仰る。東野さんは、クラブの人たちが鎌を持って放棄地の草刈りを始めた時、気紛れなボランティア活動だろうと思っていた。しかし、草刈機を購入して本格的に作業に臨む姿を見て、本気であることを知り、クラブとの連携を深めるようになったという。イネの苗は自家用とクラブ用の

350〜400箱を自宅で育てているが、その作業もクラブの人たちと一緒にやっているそうだ。

ここでは、大都市の近郊で都市化の影響を強く受け、耕作放棄により集落全体が雑草に埋もれてしまい、そのような危機に直面し、ようやく目覚めて景観保全のために守る会が結成された。その守る会を全面的に支えているのが「いこま棚田クラブ」である。クラブが行う集落内の草刈り、放棄地の復田と利用、山林整備などは、他の地域ではみられない密度の濃いボランティア活動として評価されるものである。

***注**

現在の所有する数十枚の草刈機で延べ3・5枚の面積の草刈りを行い、機費15枚を復旧4枚の草刈機、6枚で大根・玉葱・白菜・里芋・ジャガ芋などの野菜類、4枚で菜種を栽培する。田舎をオリーブとして利用している。畑田に隣接する山手では、4名の地主が所有するホからナヲを伐採、これまで500本のホダギを生くり椎茸を栽培、はびこる竹を伐採して炭を生くりしている。また、奈良県が実施する森林環境税による事業も受け入れており、3か年で1・5枚の森林の間伐を行い、市から助成金を受けている。

参加者はこの年の活動に当たるため、草刈り隊・山守隊・田圃班・畑班・竹炭班・椎茸班などに分かれ作業を行っている。収穫物の野菜類や椎茸、生産された竹炭などを持ち帰る場合はクラブに100円を入金、米は一旦守る会の会長東野さんに取り次められ、返却分(200円は50%)は1ヵ月当たり400円で会員に販売される。これら収穫物からの収入30万円、市からの助成金20万円、イベントによる収入10万円、企業数社からの助成金90万円、あわせて約150万円がクラブの活動資金になっている。

棚田の作業は「爽快！」

堀 亮太郎 (東京都品川区)

こんにちは！ 私は、昨年初めて静岡県松崎町石部の棚田でオーナーデビューしました。

今までは主に山スキーやキャンプといったアウトドアアクティビティを通して自然に親しんできました。また、元来食いしん坊という事と、食を自身で育ててみたいという願望から、友人の紹介を受け棚田のオーナー制度に応募することになりました。棚田での作業は「爽快！」という言葉につきますが、その環境を支えて頂いている地元の皆様やヴォランティアの皆様の存在には頭が下がる思いです。本当にありがとうございます。

現在、野外計画というキャンプ企画運営会社のヴォランティアスタッフとして山菜採りや秘湯登山等イベントを企画しております。今後は棚田のある地域に住む方々と交流できる機会を設け、地元料理の調理方法や農作業を通してその土地の暮らしについて学び、日本の食文化の理解を深めたいと思っています。ご協力いただける生産者の皆様や会員の皆様からは、是非情報を頂ければと思います。また、昨年田植えの時期に習い始めたjazz fluteは、まだまだ青々とした苗程度ですが、いつか棚田でのセッションもやってみたいと思います！ お酒も大好きなので、こんな私でよければお気軽にお声がけください。

オーナーのメンバーと草取り (静岡県松崎町石部棚田)



会員のひろば



会員の声募集！

「こんな活動をしています」「こんなことやります」という皆さんの声を編集部までお寄せください！「ご要望、感想やご質問でもOK！」(会員の声800字まで、会員レポート400字まで。写真も添えて) 〒160-0003 東京都新宿区西新宿セーバー161 トーシンハイムセーバー161号「棚田に吹く風 会員のひろば」宛 メールでも受付しています ↓ hiroba@tanada.or.jp

会員レポート

北海道にも棚田がありました

森田 敏春

11月に入会したばかりの、札幌の森田です。全国の棚田の様子を見聞き出来る楽しみが増えました。機関誌の「棚田に吹く風」の編集も善いですね。

その昔、北海道の山間部にはため池による灌漑で規模の小さい棚田がありました。空知の平野で生まれた小生が景観として観て心が癒される感動を覚えたのは、バリ島へ一人旅した時でした。役牛の耕作による「ライステラス」を撮影。また中国の西南部に少数民族を追う撮影旅行でも棚田に遭遇し、稲作と人々の営みに共鳴しました。以来、本州への旅行時にも棚田の写真撮るようになっています。

既にご承知のこととは思いましたが、札幌近郊にも棚田があって、その新聞記事が掲載されていたので「北海道新聞」を同封いたします。

今後のご活躍をご期待申し上げます。





会員さんの
Best Shot!

会員のみなさんの
ベストショット募集!!



みなさんが撮影した棚田や作業風景の写真など、ベストショットをコメント（70文字程度）を添えて編集部まで送ってください。毎号、紹介させていただきます！送り先は下記。

〒160-0023
東京都新宿区西新宿7-18-16
トーチンハイム704号
「棚田に吹く風 ベストショット」宛
メールでも受け付けています
⇒ hiroba@tanada.or.jp



山上の田植え

東京都品川区 永瀬 孝

谷間にせり出した舞台のような棚田。あれあれッこの田植え、皆てんでんばらばらの向きに植えてますね～。株間の型押しも何のその、にわか農民の田植えは隙間だらけで、空いたところに苗を植え足しているところです。
(新潟県十日町市 池谷の棚田)

編集部イチオシ! **BOOK & Movie**



MOVIE

ありあまるいぢやん



2005年／
オーストラリア
2011年2月19日より
全国順次ローショー
配給:アンブラグド
ドキュメント／96分

貧しいアフリカ移民が育てて3000キロメートルの旅を経て市場へ出荷されるスペインのトマト。ウィーンでは、オーストリアの大都市全員が食べていける量のパンが毎日捨てられている。一方、世界で飢餓に苦しむ人は、減るどころかむしろ増加傾向にある。なぜ、彼らが飢えるのか？ 国連で活躍する飢餓問題の第一人者ジャン・ジグレル教授や世界最大の食品会社をはじめ、漁師、農家、家畜業者を徹底取材したロードムービー。



BOOK

棚田はエライ〜棚田おもしろ体験ブック



監修:新潟県安塚町
編著:石井里津子
¥1,700(税込)
農文協
1999年7月

この本には2つの願いが込められています。一つは、実際に棚田(農村)に出かけてほしいということ。もう一つは、棚田をただの「お米をつくる場」として地域から切り離して考えないでほしいということ。棚田は、地域の文化と共にあります。人々の暮らしに寄り添い、教えや知恵を育んでいます。そして棚田は、多くの生きものとも共にあります。多くの大切なことを内包しているのです。だから、棚田へ出かけてほしい。もちろん「棚田はエライ」を手にとって。(石井里津子記)

フード・アクション・ニッポン アワード2010で入賞

報告 棚田保全プロジェクト担当 木戸幸子

棚田応援米プロジェクトが“フード・アクション・ニッポン アワード2010”のコミュニケーション啓発部門で入賞しました。(応募総数2500件)

高齢化が進む棚田地域にとって維持が難しくなっている棚田。その生産物である「棚田米」を、単なる消費物ではなく「棚田」のシンボルとして生かさないかという思いから棚田応援米プロジェクトと「棚田応援米マーク」が生まれました。このマークは保全に繋がる一定の条件下、棚田米流通システムの推進と意識の啓発に活用され、今回の受賞になりました。



Food Action Nippon 入賞マーク



棚田応援米マーク

丸の内さえずり館 スライドショー & 棚田米試食会と ボランティア説明会

2011年1月28日 報告 高桑智雄

お馴染みの丸の内さえずり館・棚田入門イベントが今年初めて開催されました。参加者は20人を超え、質問が飛び交う熱気あふれる雰囲気。また、試食した棚田米の生産地、山形県朝日町・榎平の棚田から、なんと生産者である榎平棚田保全会長の志藤さんが来場！棚田米流通への熱意や棚田の現状、そして話題の品種「つや姫」のことなどを語ってくださり、棚田米の美味しさと貴重な生産者の声を味わうことができました。場内は比較的若い男女が多く、若年層の棚田への関心の広がりをを感じる機会となりました。



棚田ネットワークの
かつどうノート



このコーナーでは、棚田ネットワークのスタッフの活動や事務局のことなどを幅広くお伝えしていきます。

本誌連載「棚田博士は今日も行く」の筆者、中島峰広氏はうまいことをいう、『農民は自力で棚田文化を築いてきた。今度は国が支援する番だ』と。もう少し実利面での恩恵があるNPO制度改革を期待するものです。

外に少ないです。半分以上尻込みするようならNPO移行は人材が確保できるまで待つのが得策。中小規模のNPOでは会計士や税理士の指導を受けるにも費用の捻出がままならず事務方が個人で対応するしか手は無い。助成金や収益事業が目的のNPO移行ならお勧め、そうでなければメリットは意外に少ないです。

社会的信用と引き替えに適正な組織運営・財務管理が要求されるのは当然の事ですが、これが厄介物だ。ひとたびNPOの認証を受けてしまうと陽の当たる部分だけを享受し、裏方の実務・運営は旧態の任意団体のまま、そんな傾向になりがちで当会も例外ではありません。

源泉徴収・仕訳・収益事業・法人税・定款これらのうちで半分は尻込みするようならNPO移行は人材が確保できるまで待つのが得策。中小規模のNPOでは会計士や税理士の指導を受けるにも費用の捻出がままならず事務方が個人で対応するしか手は無い。助成金や収益事業が目的のNPO移行ならお勧め、そうでなければメリットは意外に少ないです。

最近、NPOをめぐる国の動きが少し出てきています。任意団体もNPOを名乗ると「法人」として社会的信用が増し助成金の獲得や活動・取引などで有利です。相手の対応も変わってきます。「帰着時の現金払い」を要求するバス会社は「こちらNPO法人なのですが請求書払いにしてほしい」と駄目を押すと即OK、こんな具合です。

Kamyの
【カミー】
つぶやき
遂に最終回！



つぶやき人
事務局スタッフ カミー
(所沢市在住)



■ ブログ「棚田に吹く風」
<http://tanada.sblo.jp/>



栃木県茂木町

茂木プロジェクト

厳冬の岩ノ作棚田



上：薄氷の岩ノ作
下：岩ノ作の水



昨夏の酷暑を裏返すかのように、この冬は寒い日々が続いていますが、岩ノ作棚田もその例にもれず、ビオトープ池も薄氷に覆われています。この棚田のシンボル「ホトケドジョウ」をはじめ、ここに棲むたくさんの生きものたちも、それぞれの寝ぐらで静かに春を待っています。イノシシだけは例外で、真冬も元気に跋扈し、相変わらず畦を壊しまわっていますが…（トホホ）。

しかし、陽射しは既に春の明るさ。ここでは、春の声はニホンアカガエルの愛の歌、春の色はオオイヌノフグリなどの淡い紫色からはじまります。空を見上げると、トンビが優雅な舞を見せてくれることもあります。本誌が届く2月下旬には、木々の芽も膨らみ始めるでしょう。春はすぐそこまで来ています。今年もまた皆さまと岩ノ作棚田で会いましょう。新しい出会いが待っています。

（安井 一臣）

岐阜県恵那市

棚田ビオトープ プロジェクト

冬の棚田ビオトープ



冬の棚田ビオトープ

冬の間、棚田ビオトープの生き物はお休みします。だから、じっと見守るのが冬の棚田ビオトープの作業です。2月下旬から3月上旬、水が抜けてしまった棚田ビオトープに水を張ります。するとこの辺りでは3月の下旬ぐらいから、棚田ビオトープの誘致目標種（来て欲しい生き物）であるヤマアカガエルが卵を産みにきます。そこで、会報の中でもお知らせしている通りですが、3月20日（日）に棚田ビオトーププロジェクト岐阜恵那「第4回かえるの卵を探そう！」を開催します。棚田ビオトープについての説明や見学、坂折棚田全域のヤマアカガエルの卵塊を探したりといった企画です。ぜひご参加ください。

今、坂折棚田は重要文化的景観に選定されるよう準備をしています。産卵期にキョロキョロと鳴くヤマアカガエルを始め、生き物たちも棚田の風景を構成する一要素です。石積みの坂折棚田の「農」のサイクルに適応しながら、生き物たちは春を待っています。

（相田 明）

大阪市中央区

大阪プロジェクト

里山自然環境整備士 Web 検定が始まります



里山自然環境整備士
(Eco Circulation Planner) のロゴ

前号からの2ヶ月間、棚田での活動はなく、そのかわり奈良県大和郡山形の矢田山周辺の里山に何度も通っていました。

そこはもともと耕作放棄された棚田と荒れた里山で、ジャングルのような所が、生きた棚田と畑、ビオトープとしての里山に還元されました。広さは約2町歩、すべて自然栽培なので生きものもいっぱいです。

この仕事を成し遂げてきたのが一般社団法人「里山自然農法協会」さんで、縁あって棚田むすびの会とコラボレーションさせていただいています。

その里山自然農法協会さんが、「里山自然環境整備士」という資格認定制度を始めました。里山を還元し、里山の自然環境（生物多様性）を次世代に残していく職業で、耕作放棄地を還元し、農業を営みながら里山・棚田を手入れ、保全していきます。

初級コースのWeb検定試験が始まっています。「里山自然環境整備士」でぜひ検索してみてください。

（中崎 義志晴）

開催決定!

棚田ネットワーク 企画展示

棚田は守るべきなのか?

～棚田を取り巻く『命』～

『そもそも棚田を守るべきなのか?』という素朴な疑問があります。むしろ「棚田を保全するのではなく、その地域に合った植生の森や林に戻した方が環境にいいのではないか」という意見です。

この疑問をテーマに、棚田を取り巻く『命』＝『まもりびと・いきもの』という視点から棚田を守ることの“意義”や“これからの可能性”をみなさんと共に考えていく形で展開する参加型展示を行います。

この企画では、写真・パネル展示に加え、ディスカッション、セミナーなど会期中様々なイベントも開催。

田植え体験コーナーも登場する予定です!

※展示企画詳細は、後日棚田ネットワークホームページでご案内いたします。

開催期間: 2011年**4月1日**(金)～**5月30日**(月)

会場: **丸の内さえずり館** (JR・東京メトロ有楽町駅・東京メトロ日比谷駅)

Open 月曜～金曜 11:00～19:00

ディスカッション **4月1日**(金) 18:30～

期間中に

セミナー **4月22日**(金) 18:30～

開催の
イベント

セミナー **5月27日**(金) 18:30～

棚田ネットワーク・白熱教室、『棚田は守るべきなのか?』

○参加者: 棚田のまもりびと、棚田の好きなひと、棚田が気になる人 など

※棚田のいきものがかり、に聞いてみよう!

○講師: 安井一臣 (NPO法人 棚田ネットワーク)

※棚田番長、に聞いてみよう!

○講師: 大石惣一郎(新潟県佐渡市若首棚田 棚田おじさん)

期間中「田植え体験コーナー」も登場する予定です!

お手伝いしていただける
ボランティアも随時募集中!

NPO法人
棚田ネットワーク



わたしたちと「棚田の応援団」やりませんか!

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい!」という会員によって自主的に運営されているNPOです。

消えゆく美しい「棚田」をどのように保全していくことができるのでしょうか?一緒に考えませんか?ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう!

会員になると!

会報誌「棚田に吹く風」(年6回)やイベント案内お届けの他、棚田ネットワークが主催する各プロジェクト(イベント)への参加や、スタッフとしての活動もできます。

年会費

○個人会員

維持会員 1口1万円(1口以上)

一般会員 3,000円

学生会員 2,000円

法人会員を募集しています!

私たちの活動にご支援・ご協力をいただける、企業、団体、事業主さまを募集しています。詳細はお問い合わせください。

年会費

○法人会員

1口3万円(1口以上)

この上のスペース(ページ上1/2サイズ)は法人会員さまのPRスペースとして広告や広報にご利用いただけます。(詳細はお問い合わせください)

編集部から

ちよつと、キレイすぎやしませんか?

昨年からのリニューアルした会報「棚田に吹く風」の評判がとてもよいです。やはりオールカラーということと、全国から集まる美しい棚田写真を思う存分お楽しみ頂けるからでしょう。編集部もかなり気を良くして、今まで出来なかったレイアウトをたくさん試してきました。しかし、ここに来てふとした疑問が…。ちよつとキレイすぎやしませんか?棚田の現状は決してキレイなところばかりではない。それを伝えるのも棚田ネットワークの使命です。というわけで今回は、初心に帰る気持ちで、あえて耕作放棄田について特集を組んでみました。理想と現実、多方面からの視点を盛り込みつつ、議論が巻き起こる誌面を目指していきます!

ホームページのぞき見!

棚田ネットワークHPIは、主要検索サイトの「棚田」で、ほぼトップにランクする優良サイトです!内容も盛りだくさん、今年はウェブ独自企画も計画!乞うご期待。



おすすめコンテンツ

『棚田の書棚』

長らく整備中だった、棚田関連書籍コーナーがリニューアル!ジャンル別にカテゴリーを分けて、より見やすくなりました。

www.tanada.or.jp



2011年3月号 Vol.75

発行

NPO法人
棚田ネットワーク

〒160-0023

東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号

Tel / Fax 03-5386-4001

e-mail : info@tanada.or.jp URL : www.tanada.or.jp